様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０３８５２

研究課題名（和文）近現代日本における酒類消費に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Brewed Beverage Conumption in Modern Japan

研究代表者
大島　朋剛（OSHIMA, Tomotaka）

神奈川大学・経済学部・教授

研究者番号：２０６１９１９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果は大きく2つにまとめられる。1つは、秋田県鹿角市の旧酒造家の史料調査から、鉱山労働者や農民たちの酒類の消費行動に関する特徴を明らかにしたことである。前者は、労働による疲れを癒やすためとはいえ、単に安いだけの酒や少量の高アルコール酒を摂取するよりも、むしろ高価格の酒を飲む傾向にあった。また後者は、違法な濁酒の摂取が多いとされた地でも、「米酒交換」という制度が清酒の消費者に転換する可能性があった。2つ目は、容器に使われる木材の変化が清酒の品質に及ぼす影響を明らかにしたことである。消費者の嗜好の変化の側面だけでなく、容器の変化に伴う味の甘口化が灘酒ブランドでも起きた点を史料から発見できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義は、従来の酒造業史研究において、消費に関する研究はおそらく重要であると認識されながらも、その研究の難しさからさほど取り上げられてきたとは言えなかった部分に取り組んだ点である。特に周辺地域の特徴を踏まえたり、「味」が如何に作られるかという視点で消費を取り上げた点にオリジナリティがあると言える。
社会的意義は、清酒を事例にしてその地域性が存続し続ける理由を考えたことが、現代社会でも重視される「多様性」にもつなげられることである。

研究成果の概要（英文）：The results of the research can be summarized in two main ways: First, a survey of the historical records of former sake breweries in Kazuno, Akita Prefecture, revealed characteristics related to the consumption behavior of alcoholic beverages by miners and farmers. The former tended to drink high-priced sake rather than simply consume cheap sake or small amounts of high-alcohol liquor, even to relieve fatigue from labor. The latter was also a potential conversion of sake consumers to the system of “rice sake exchange,” even in areas where illegal doburoku consumption was considered common. second, the study revealed the effect of changes in the wood used for containers on the quality of sake. In addition to the aspect of consumers' changing tastes, I was able to discover from the historical records that the sweetening of taste that accompanied the change in containers also occurred in the Nada sake brand.

研究分野：経済史

キーワード：清酒　酒類消費　酒造教育　酒造労働　酒造米

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近代日本の酒造業は、「ブランドの確立」、「桶取引」、「ブレンド」をキーワードとして、固有の論理の下に発展したことが明らかとなってきた。報告者も、これまでに清酒醸造業固有の産業発展の論理を、将来にも活かしうる産地競争力やブランドの力の強化という側面から再評価するべく研究を行った。しかし、その際に課題として残されたのが消費に関する分析であった。

21 世紀に入ると、国内外の経済史研究者たちから、消費に対して強いまなざしが向けられるようになった（中西聡「文明開化と民衆生活」石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 1 幕末維新期』東京大学出版会、2000 年、Penelope Franks and Janet Hunter,(eds.)“The Historical Consumer: Consumption and Everyday Life in Japan, 1850-2000”Palgrave Macmillan,2012)。また大正・昭和戦前期を大衆消費社会への胎動期と位置づける研究（満薗勇『日本型大衆消費社会への胎動』東京大学出版会、2014 年）も発表されたが、一般的に同社会の誕生と合わせて議論される耐久消費財産業が十分定着していない当該期には、生活に密着した最終消費産業との関係をみることに意味があろう。報告者はこうした研究状況に鑑み、日本の食文化の国際化に大きな役目を果たしつつある「酒」の消費構造を検討するという今回の研究課題を設定するに至った。

２．研究の目的

本研究は、20 世紀前半には一定の工業化が進展した日本において、一方では農民や炭坑夫たちにとって栄養補給品としての生活必需品であり、他方では都市サラリーマン層らにとって嗜好品的性格を強く帯びてゆくことになった「酒」の消費構造の変化とその変革主体の解明を目的として開始されたものであった。自家生産の濁酒と市販清酒の並存する状況から、市販のビールや新式焼酎などの市場への浸透が徐々に進む状況へと移りゆく中で、消費者にとって「酒」の選択の幅が広がった。その際の選択基準とは価格なのか、あるいは高品質の安定なのか。地方資産家の一次史料等による実証分析から、合理的に行動した都市および農村における各階級の消費者による選択が、結果として今も残る清酒産地の分散に結びついたのではないかという仮説のもとで研究を進めた。

３．研究の方法

まず、研究期間を通して継続的に行われたのが、秋田県鹿角市の旧地主酒屋兼販売店所蔵

の史料に関する調査、整理および撮影であった。平成 29 年 9 月には、文書保存箱に移し替えた文書の写真による現状記録および概要把握を開始した。史料の所有主により現在資料を保存している蔵から別の蔵に移し替えてほしい旨の要請があり、同年 11 月に木箱に入っていた分の史料をすべて史料箱に移し替えた上で、別の蔵に運び入れ、研究費にて購入したかご台車に整理して保管した。平成 30 年 3 月には、概要把握が未実施であった箱に目を通し、その中からは幕末・明治初期の書簡類や所蔵主の家の由来などが記された「永福帳」の撮影なども行った。そのほかにも、鹿角の周辺に存在した鉱山町の鉱夫に対する清酒販売状況や代金決済に関する帳簿類についても閲覧を行い、あわせて上記史料の撮影と、それを基にしたデータベース作成を並行して実施した。その後も、概要把握が未実施であった箱に目を通し、文書保存箱に移し替えた文書の写真による現状記録および概要把握を行い、データベースの更新作業を実施した。

また、鹿角の近隣に存在した鉱山企業の史料の中から、鉱山夫の生活の様子が分かる史料を調査するべく、平成 30 年 3 月には秋田県小坂町の図書館や資料館を巡って史料蒐集を行った。その中からは、当時の鉱山労働者の酒類消費にかかわる資料も新たに発見された。

こうした鹿角地域の史料調査によって得られた史料をもとにして、研究協力者とともに複数回の研究発表を行った。まず、平成 30 年 8 月には、大阪市立大学梅田キャンパスにて行われた経営史学会関西部会大会において、大島を代表とし、冨善一敏氏（東京大学）および大澤篤氏（明治学院大学）とともに「酒造家と地域社会－秋田県鹿角郡関善酒店の事例から－」という演目で研究発表を行った。この中で、大島は地方酒造家の酒造経営について、冨善は鹿角地域と関善家文書について、大澤は企業成長と地主制について、それぞれの視点から報告した。また地域の住民の生の声を聴くべく、令和元年年 11 月には、秋田県鹿角市立花輪図書館および鹿角市教育委員会主催による「〈歴史講座〉古文書からたどるかづのの酒づくり」というシンポジウムにおいて、冨善一敏氏（東京大学）および大澤篤氏（明治学院大学）とともに講演を行った。講演は、大澤氏「関善酒店文書と鹿角の近代」、冨善氏「関善調査の概要」、大島「古文書からたどるかづのの酒づくり」の順で行われ、地元住民の方々からは多くの質問とともに、貴重なお話を伺う機会に恵まれた。更にそれを精緻化し、令和 3 年 11 月には秋田近代史研究会秋季研究会（於はなびアム）において、「鹿角郡花輪町旧関善酒店文書をめぐる諸問題－酒造家及び地主・名望家の側面から－」という題目で研究協力者 2 名との研究発表を行った。研究の対象となる秋田県の研究者からのコメントをいただけたことは大変有益であった。またそれに伴い、研究実施者と研究協力者 2 名の 3 名にて

大仙市アーカイブズを見学し、現地の関連史料を発掘できた。

本研究に関連し、鹿角地域の調査から得られた成果としては、大きくわけて 3 つ述べることができる。1 つは、歴代の関善次郎家の当主を中心とした酒造りの変容をつぶさに追うことができたことで、鉱山に囲まれた特殊な酒の消費地における酒造りの変容を垣間見ることができたことである。つまりそれは、鉱山労働者たちは単純に「酔えればよい」という理由で安い酒を大量に飲むであったり、少量の高アルコール酒を飲むであったりしたわけではなさそうであるということである。秋田県の清酒は、後述する大阪高等工業学校醸造科卒業生たちのネットワークも活用しながら、高品位なものを作るべく努力を重ね、その結果は各品評会における高評価にもつながっていた。そうした酒は高価格で販売されたが、おそらく生産者側の販売力の差もあるのだろうか、如何せん地方市場では競争も激しく、思うような販売増大を実現できない事例も見受けられた。2 つ目は農村の消費についてである。秋田県はどぶろくといった違反酒の検挙件数が多いことで知られるが、それを減少させることを目的とした「米酒交換」制度が農村を清酒の消費者にすることに重要な役割を果たしていたことは興味深く、農民がどぶろくと清酒のどちらを選択するのか、その理由の一端を知ることができそうな研究となった。3 つ目は、史料箱約 120 箱以上にのぼる整理史料の仮目録を作成できたことである。まだ完成ではないが、その概要はほぼ分かる程度まで整理をして、目録を作成できたことはこの研究の大きな成果の 1 つでもある。

次に今回の研究で消費と関連するテーマへの広がりをみせることになったのが、「味」に関連することである。ただし、それは直接的に「味」の変化を知ることができたというよりは、清酒の生産方法の部分からたどり着いた内容ともいえる。具体的には、平成 31 年 3 月に行った兵庫県篠山市の丹波杜氏酒造記念館および同県西宮市の白鹿記念酒造博物館における史料調査で、とりわけ酒造労働や米（酒の原料ともなる）に関係する史料の閲覧・撮影ができたことによる。また、新型コロナウィルス感染拡大の中にあった令和 3 年 8 月に実施した神戸大学に所蔵される酒造容器を扱う問屋の史料を閲覧・撮影もこの研究に重要な意味をもたらした。酒の消費に関わる研究の 1 つは、酒造容器に関する史料の調査である。用いられる容器の素材の変化が清酒の品質（味）に及ぼす影響とそれを酒造メーカーがどのように捉えていたのかということを関連付けて把握できるようになった。つまり、樽の材料である杉材の生産地の違いが、清酒メーカーのブランド戦略にどのような影響を及ぼしたのかについて、灘五郷の大手酒造メーカーにおいて収集した一次史料を整理する中で明らかとなってきた。また大手メーカーの原料米仕入れに関する史料の整理から、新興産地の追

い上げに対して、独自の路線を進んだとされる灘の酒が、大衆の好むタイプの酒の味に変化する過程とその時期を見出すこともできたことは大きな成果であったといえる。まだこの研究については、成果を発表する段階にまで達してはいないが、酒の消費者の嗜好が変わる中で、容器に求められる機能がある時期変化したことや、従来の産地の特徴とされた味まで変化することがあったこと（例えば灘酒の甘口化といった現象）などを今後明らかにできるのではないかと考えている。清酒の容器は、戦前において樽から瓶に移り変わってゆくが、その理由について研究実施者はこれまで、流通過程における商品操作の可能性の排除を目的としたものと考えてきた。ただし壜詰になることにより、酒の味わいは変化するのであって、そのことを踏まえると、従来の産地の酒の味の特徴は変化しうるという点を、清酒容器の変化と、原料米の変化、そして杜氏・蔵人たちの酒造りのあり方の変化に関連する史料から総合的に捉えることできるとまとめられる可能性を本研究で確認できた。

なお、当初予定していたビール企業（アサヒビール株式会社やサッポロビール株式会社）の所蔵する酒類消費に関する動向をとらえた史料の調査は、新型コロナウィルス感染拡大の影響などもあって結局行うことがでなかった。しかし、当初の予定から少し視角を変えて研究をうまく軌道修正できたといえる。

４．研究成果

最後に、同じく産地による酒の味わいの違いをもたらすきっかけの 1 つになりえたと考える醸造教育の意義について、これまですすめてきた研究をまとめて、大島朋剛「戦前期日本酒造業にみる醸造教育とその意義」井奥成彦・中西聡編『醸造業の展開と地方の工業化』（慶應義塾大学出版会、2023 年）として研究書に論文をまとめて公開した。そこでは、醸造教育が日本の酒造業に高位平準化をもたらしたことや、そのルートには高等教育を通じて技師を育てる道と、現場の杜氏を各地で育てる道の両面があり、地域によって酒造現場への教育内容の浸透の違いがあったことも、産地の多様化につながったことを見出した。なお、この研究にとりかかるきっかけとなったのも、鹿角の関善酒店の関善次郎（4 代目）がかつて大阪高等工業学校醸造科の卒業生であったというところから始まっている。それに関連し、平成 29 年 4 月には北海道余市町のニッカウヰスキーの博物館を訪れ、その中に大阪高等工業学校の醸造教育の内容を示す資料を発見したことは、今後の研究をさらに進展させるものと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 冨善一敏	４．巻 61
２．論文標題 旧関善酒店文書調査について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 秋田近代史研究	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大澤篤	４．巻 61
２．論文標題 煙害問題と地主制	５．発行年 2022年
３．雑誌名 秋田近代史研究	６．最初と最後の頁 7-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大島朋剛	４．巻 第50号別冊
２．論文標題 三井物産による灘酒の一手販売について	５．発行年 2017年
３．雑誌名 三井文庫論叢	６．最初と最後の頁 38-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 大島朋剛・冨善一敏・大澤篤
２．発表標題 鹿角郡塙町旧関善酒店文書をめぐる諸問題―酒造家及び地主・名望家の側面から―
３．学会等名 秋田近代史研究会2021秋季研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大島朋剛
２．発表標題 戦前期東北地方の地主兼酒造家による酒造経営の発展と限界－秋田県鹿角郡花輪町関善次郎家を事例として－
３．学会等名 経営史学会西日本部会9月例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大島朋剛・冨善一敏・大澤篤
２．発表標題 古文書からたどるかづのの酒づくり
３．学会等名 鹿角市立図書館主催歴史講座（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大島朋剛
２．発表標題 戦前期灘酒造業にみる出稼ぎ労働者とその移動
３．学会等名 第22回経営史学会東北ワークショップ（東北大学経済史経営史研究会との共催）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大島朋剛・冨善一敏・大澤篤
２．発表標題 酒造家と地域社会－秋田県鹿角郡関善酒店の事例から－
３．学会等名 経営史学会関西部会大会2018年
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

1．著者名 井奥成彦、中西聡	4．発行年 2023年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 480
3．書名 醸造業の展開と地方の工業化 ： 近世・近代日本の地域経済	

1．著者名 阿部 正浩、菅 万理、勇上 和史	4．発行年 2017年
2．出版社 中央経済社	5．総ページ数 240
3．書名 職業の経済学	

1．著者名 福永文夫監修	4．発行年 2023年
2．出版社 兵庫県	5．総ページ数 610
3．書名 兵庫県150周年記念　兵庫県史～この50年の歩み　第1巻	

1．著者名 福永文夫監修	4．発行年 2023年
2．出版社 兵庫県	5．総ページ数 566
3．書名 兵庫県150周年記念　兵庫県史～この50年の歩み　第2巻	

1．著者名 福永文夫監修	4．発行年 2024年
2．出版社 兵庫県	5．総ページ数 738
3．書名 兵庫県150周年記念　兵庫県史～この50年の歩み　第3巻	

1．著者名 福永文夫監修	4．発行年 2024年
2．出版社 兵庫県	5．総ページ数 652
3．書名 兵庫県150周年記念　兵庫県史～この50年の歩み　第4巻	

1．著者名 阿部 猛・落合 功・谷本 雅之・浅井 良夫（編）	4．発行年 2020年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 432
3．書名 郷土史大系　生産・流通　（下）　―鉱山業・製造業・商業・金融―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	冨善　一敏 (TOMIZEN Kazutoshi) (80396829)	東京大学・大学院経済学研究科(経済学部)・学術支援専門職員 (12601)	
研究協力者	大澤　篤 (OHSAWA Atsushi) (30756482)	兵庫県立大学・政策科学研究所・講師 (24506)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関